# 青年期女性における親性準備性と重要な他者との関連[1]

松　本　奈　巳[2]・重　橋　のぞみ

## Relationship Between Parental Readiness and Significant Others in Adolescent Women 2

Nami Matumoto・Nozomi Jyubashi

近年、少子化が問題視しされる中（厚生労働省，2014）、少子化対策のひとつにとして、次世代を育む親となるための支援があげられている。これは、子どもを育てている親だけではなく、親になる前段階にある思春期・青年期にも焦点を当てた支援である。その背景には「育児の学習」ができにくい社会状況（川瀬，2010）、親になる前に乳幼児との接触体験がない人の増加（五十嵐，2011）、児童虐待の増加（瀧川・中見・桂田，2012）がある。このように、育児学習のできない社会環境により生じる問題を減少するための一つとして、親となるための資質を学習・育成する親性準備性が重要視されてきている。

親性準備性とは、親になる前段階である中・高校生そして青年期を対象に、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質について研究される中で生まれた用語である（小池，2013）。我が国では、岩田ら（1982）によって初めて「親準備性」という概念が示され、定義は「望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態」としている。それ以来、親になる準備段階にある青年期の男女を対象として、親になることへの意識や態度、子育てに対する知識などについての研究（中嶋・後藤，2009）が行われてきた。その中で乳幼児に接した経験や子どもへの好意感情が親性準備性に肯定的な影響を及ぼすことが指摘されてきた（岡本・古賀，2004；川瀬，2010）。

親性に関する先行研究は、「親準備性」「母性準備性」「養護性」など、さまざまな言い方で呼ばれており、定義の仕方も１つではない。また、先行研究の多くは親性準備性を養育役割や親になることを前提としており、「そのための準備」として捉えている（平田，1999；岡本・古賀，2004）。しかし、近年では晩婚化や既婚女性の就業率の上昇など、多様な生き方が容認されており、ますます少子高齢化になると言われている。今後は我が子だけを育てる親性準備だけではなく「社会全体で子どもを育てる」視点から親性準備性を育成することも必要になるであろう。伊藤（2003）は、親性準備性を「生涯発達の視点から親になってもならなくても健全な次世代を育てる子育てを支援する社会の一員として備えるべき資質」とし、養育役割だけに限定しない定義をする必要性を示唆している。これに対し、松本・重橋（2016）は、青年が親になることに対する価値や心理状態、心理的意識に焦点を当てて親性準備性を検討する必要性を指摘し、研究を行った。青年のどのような心理状態が親性準備性に肯定的な影響を与え、ひいてはより安定した親性準備性を獲得しやすいかが明らかになれば、心理的に安定し成熟した親になることへの手がかりとなろう。そこで本研究でも、親性準備性を「次世代を育成する意識を有する心理的『親』の準備状態」と定義し、我が子に対する親性だけはなく一般的な乳幼児に対する心理的感情として捉えることする。

ところで、先行研究より幼少期の親子関係が親性準備性に影響をもたらすことが明らかとなっている（五十嵐，2011；寺尾，2012）。一方で成人期の他者への愛着スタイルが親性準備性に影響を与えるという指摘もある（小池，2013）。虐待の世代間伝達の研究は、母親の内的表象に注目し、過去に虐待を受けた「事実」よりも現在の受け止め方が重要だという指摘があり（鵜飼，2000）、幼少期の親子関係に対するその後の認知の仕方が親準備性不全につながる原因とも言われている（諸井ら，2013）。このことは、過去の親子関係が不安定的であっても、現在の愛着スタイルが良好であれば親性準備性を備えられる可能性を示唆している。Bowlby（1969）が提唱した内的作業モデル（Internal Working Model：以下IWMと表記）は、幼少期に愛着対象との持続的な相互交渉を通して、人の内部に形成される愛着対象と自己に対する心的表象のことである。このIWMが親性準備性に影響を与える要因の一つだといえよう。

小池（2013）は、青年期女性を対象に幼少期と成人期の愛着スタイル別に親性準備性に与える影響を検討している。その結果、主に成人期の愛着スタイルが親性準備性を予測することを明らかにした。一方、松本・重橋（2016）は、幼少期から青年期にかけたIWMの変容によって心理的親性準備性のあり方に差があるかを検討している。その結果、IWMが幼少期にネガティブであっても、その後IWMが安定型に変容することによって、親性準備性の一部が形成される可能性を示している。このような研究結果が示される一方で、養育者のIWM

と同質のアタッチメントの世代間伝達も実証されている（数井、遠藤、田中ほか2000）。そのため、幼少期のIWMが不安定な人々がIWMをポジティブに変容する要因と親性準備性との関連を検討することがさらに求められる。

IWMの変容に関する研究では、重要な他者との出会いや存在が欠かせないことが指摘されている（内田，2014；山岸，2013）。特に内田（2014）は重要な他者として「前向きな存在」や厳しく信念をもっている「大人的存在」がIWMの変容に影響を与えることを示している。一方、親性準備性に関する研究では、親性準備性を育む際の他者の存在に関する研究がほとんどない。唯一、岡野（2003）の研究では、「頼りになる人」「厳しく指導してくれる人」がいない群において、親性準備性が育みにくい可能性を示唆しているが実証的な研究はされていない。これらの先行研究からIWMの変容に影響を与える重要な他者と親性準備性に影響を与える重要な他者は共通している可能性が考えられる。

そこで本研究では、松本・重橋（2016）の研究を踏まえ、親性準備性に与える重要な他者の影響に着目し、親性準備性と重要な他者との関連を検討する。重要な他者との出会いや存在が与える影響を見ていくことで、親性準備性をより心理的に安定し成熟したものにするための知見が得られると考える。

## 方法

### 1．調査対象者

A県A大学の学生104名を対象とし、男性回答と不備回答を除く97名を分析対象者とした。

### 2．調査時期

2015年11月の授業中に無記名方式の質問紙で配布、回収した。調査対象者の学生には、質問の回答は任意であること、回答しないことで不利益は生じないこと、研究以外の目的で使用されることがないことを質問紙に明記し、同意を得た上で調査を行った。

### 3．質問紙の構成

**親性準備性に関する質問紙**

松本（2016）で用いた親性準備性質問紙を用いた。項目を表1に示す。

**重要な他者に関する質問**

重要な他者に関する質問は内田（2014）を参考に、以下の3つの領域から構成される質問紙を用いた。

**①　重要な他者の存在と属性**

重要な他者について、3つの質問を行った。

「重要な他者の有無」：重要な他者といえる人物が親以外で存在したかどうかを「いる」「いない」の二択で回答を求めた。

「関係」：最も影響を受けた「重要な他者」との関係性については[先生・友人・恋人・兄弟・先輩・後輩・その他]の中から回答を求めた。

「時期」：重要な他者からもっとも影響を受けた時期について[小学校高学年・中学校・高校・大学・その他]から回答を求めた。

**②　重要な他者のイメージ**

「重要な他者」のイメージを聞くために内田（2004）の研究を参考に12項目の特性に関する質問項目を提示し、「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法でたずねた。項目は表2に示す。

**③　重要な他者からの影響**

重要な他者からどのような影響を受けたのかについて、内田（2014）を参考に[思っていることを言えるようになった・自立しようと思った・気持ちが安定した・その他]の中から回答を求めた。

## 結果

### 1　重要な他者の存在と属性

重要な他者が「いる」と回答した者は88名、「いない」と回答した者は9名であった。以後の分析は、「いる」と答えた88名の回答を分析の対象とした。

分析対象者の親性準備性質問紙の平均値を基準に、親性準備性High群とLow群に分類した（以下、親性High群・Low群）。親性High群・Low群別に重要な他者の関係性を示したのが図1である。両群ともに友人が5割を超えているが親性High群では恋人の割合が大きくなっており、一方のLow群では先生の割合が高くなっていることが特徴的である。

次に重要な他者から影響を受けた時期を群別にまとめた結果を図2に示す。親性High群は大学生の時期が約5割に対して、Low群は中学校と高校の割合が高いことがわかった。

親性準備性が形成されにくい親性Low群の「重要な他者との関係性」と「影響を受けた時期」を詳細に調査するため、第1・2に選択された先生と友人に出会った時期をそれぞれ円グラフにまとめた（図3、図4）。先生に出会った時期では、High群Low群共に中学・高校での先生との出会いが半数を超える結果となった。しかし、High群においては大学での出会いがある一方で、Low群では0％となった。友人に出会った時期ではHigh群Low群共に高校が半数を超えた。その一方で、High群は大学時に出会ったと12%が答えているがLow群は0％であり、中学での出会いがHigh群よりも約5倍高くなっていることがわかった。

### 2．重要な他者のイメージ

主因子法にて因子分析を行った。スクリープロットおよび固有値より3因子が妥当と考えられた。また、内田（2014）の重要な他者の特性においても3因子であったため、3因子にて再度因子分析を行った（主因子法、Promax法回転）。その結果、すべての項目が負荷量0.5

表１　親性準備性尺度

| | |
|---|---|
| **第1因子：子どもへの興味・関心** | |
| 1 | 幼い子どもと遊ぶのが好きだ。 |
| 24 | 幼い子どもの姿をつい目で追っていることがある。 |
| 8 | 幼い子どもに関心がある。 |
| 39 | 子どもをあまり好きではない（R） |
| 43 | 小さい子どもと関わることは自分に向かないと思う。（R） |
| 18 | 幼い子どもを見ると微笑んだり、興味を示したくなる。 |
| 12 | 幼い子どものこころの動きに興味がある。 |
| 34 | 幼い子どもが泣いていると、何とかしたいと思う。 |
| 30 | 子どもとはおもしろい存在だと思う。 |
| **第2因子：親になることへの要件** | |
| 32 | 親になることは子どもに愛情を持ち大切に育てることだと思う。 |
| 38 | 親になることは子どもの命や成長、人生に責任を持つことだと思う。 |
| 15 | 親になることは子どもの成長を見守り支えになることだと思う。 |
| 29 | 親になると子育てを放棄してはいけないと思う。 |
| 7 | 親になると子どもを尊重する気持ちが必要であると思う。 |
| 16 | 親になったら子育てについて学んでいく姿勢が必要であると思う。 |
| 20 | 親になることは子どもを守ることだと思う。 |
| 25 | 親になることは子どもの成長を楽しみ、幸せを感じることだと思う。 |
| 27 | 親になるためには優しさや気遣いが必要であると思う。 |
| **第3因子：親になることの意義** | |
| 40 | 親になることは自分自身も成長する機会を得ることだと思う。 |
| 44 | 親になることは自分の学習の機会を得ることだと思う。 |
| 35 | 親になることは価値ある立派なことだと思う。 |
| 19 | 親になることはかけがえのない喜びだと思う。 |
| 13 | 親になることは生き甲斐を得ることだと思う。 |
| 23 | 親になることで新しい人生観・価値観を得ると思う。 |
| 41 | 親になるためには常識を持ち、世間を知ることが必要であると思う。 |
| **第4因子：親になることへの不安感・負担感** | |
| 33 | 親になると自由が制限されると思う。 |
| 22 | 親になると時間的制約が生じると思う。 |
| 42 | 親になることに漠然とした負担感を抱く。 |
| 28 | 親になることに漠然とした不安を感じる。 |
| 37 | 親になると自分を抑制することが求められると思う。 |
| 11 | 子育ては孤独な仕事だと思う。 |
| **第5因子：モデルとしての母親** | |
| 3 | 自分の母親のようになりたい。 |
| 14 | 母親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい。 |
| 26 | 母親についていい思い出があまりない（R） |

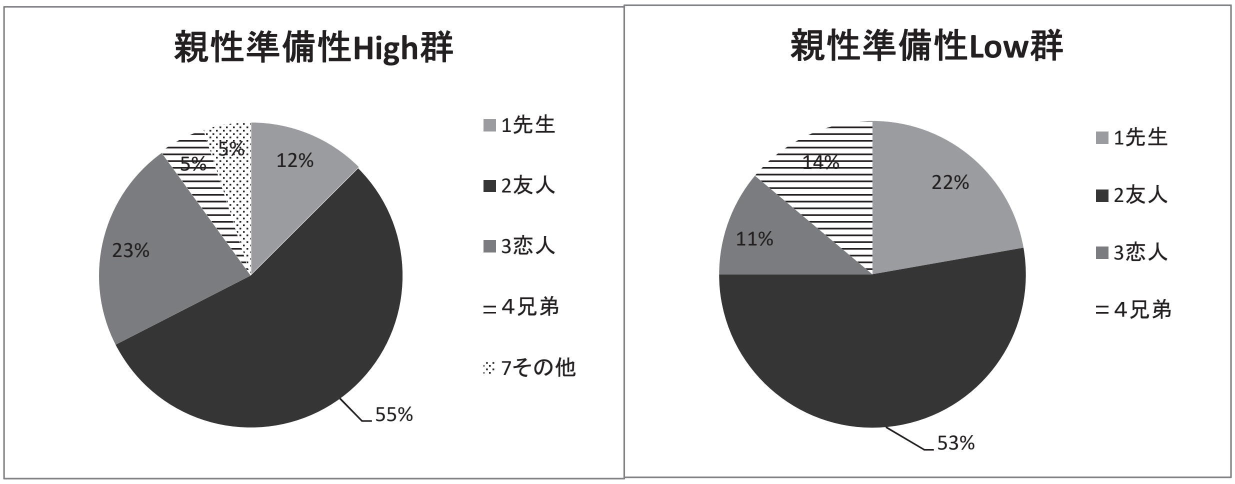


図 1　群別の重要な他者との関係性

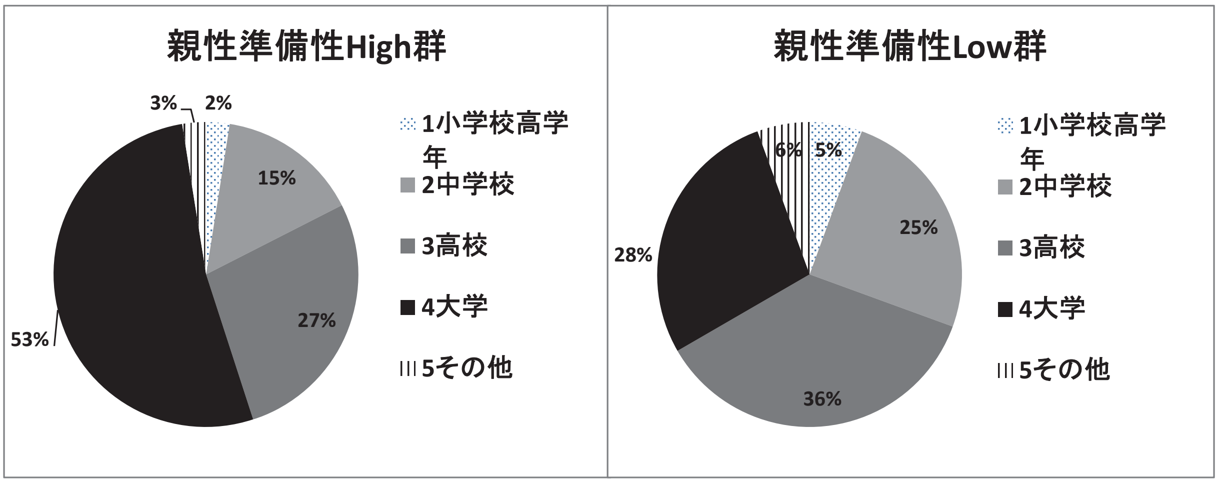


図 2　群別の重要な他者から影響を受けた時期

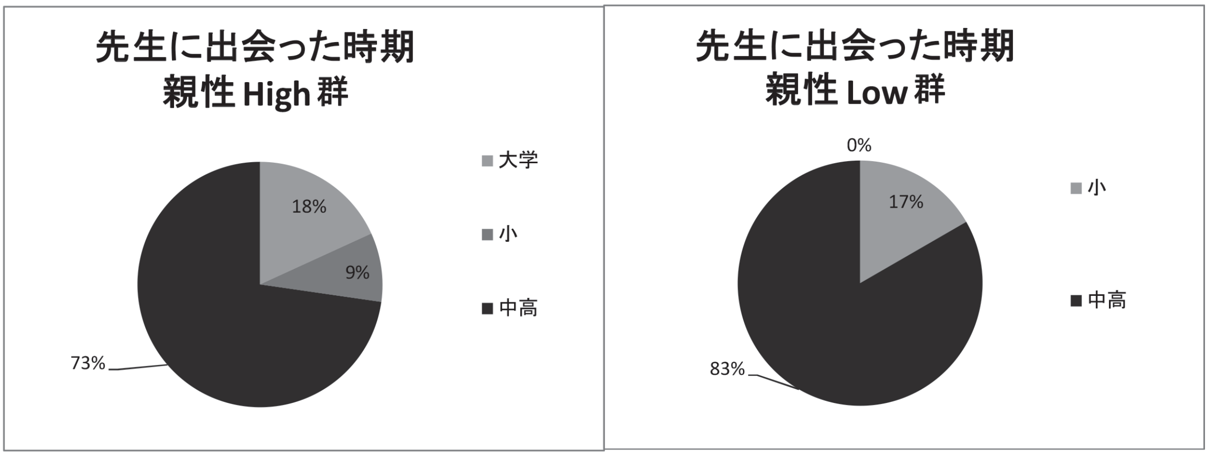


図 3　群別の先生に出会った時期

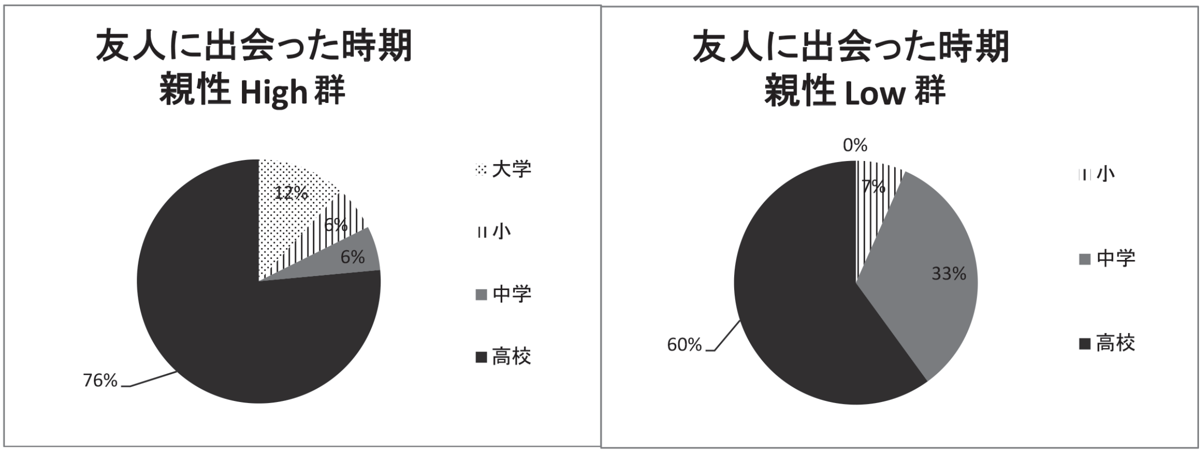


図４　群別の友人に出会った時期

以上であったため、先行研究と同様にどのような人であるかを命名した。第一因子は、「良いところを見つけてくれる人」など他者が自分のことを受け止めて理解してくれようとする項目で構成されていたため「自分を認めてくれる存在」と命名した。第二因子は、「社交的で明るく行動的な人」など、積極性があり前向きな他者の存在を示す項目で構成されているため、先行研究にならい「前向きな存在」とした。第三因子は、「信念を持っている人」など厳しさや信念をもっている人を示す項目で構成されていたため、先行研究にならい「大人的存在」と命名した（表２）。

**親性準備性と重要な他者イメージの関連性**

親性 High 群・Low 群を独立変数、重要な他者イメージを従属変数として $t$ 検をおこなった。結果、「自分を認めてくれる存在」（$t(86) = 4.04,\ p < .001$）に有意差がみられ、「前向きな存在」、「大人的存在」には差がみられなかった（表３）。

**重要な他者からの影響**

重要な他者からどのような影響を受けたのかについて円グラフにまとめた（図５）。

親性 High 群・Low 群ともに各項目の割合に大きな差はみられなかった。また、「気持ちが安定した」と感じている割合が両群ともにほぼ半数であった。

## 考察

**重要な他者の存在と属性について**

親性 High 群では、恋人の割合が親性 Low 群より多くなっており、友人関係においても約10％ではあるが、親性 High 群のみが大学で出会ったと答えている。この結果から、親性 High 群の方が比較的遅い時期に重要な他者と出会ったと感じていることがわかる。青年期の友人関係は、安定した感情で友人関係を築いていることや（榎本，1999）、友人との感覚の共有によって親に代わる

表２　重要な他者イメージの因子分析結果

| | 因子負荷量 | | |
|---|---|---|---|
| | F1 | F2 | F3 |
| **第1因子：自分を認めてくれる存在（6項目）** | | | |
| 8　良いところを見つけてくれる人 | **.77** | .10 | .19 |
| 11　話を聞いてくれ認めてくれる人 | **.77** | .19 | −.13 |
| 1　真正面から受け止めてくれる人 | **.72** | .13 | .19 |
| 12　頼りになる人 | **.65** | .20 | .14 |
| 10　一人前の人間として扱ってくれる人 | **.61** | .09 | .11 |
| 4　あたたかい人 | **.59** | .08 | .11 |
| **第2因子：前向きな存在（3項目）** | | | |
| 5　社交的で明るく行動的な人 | .20 | **.72** | .09 |
| 2　好奇心旺盛な人 | −.02 | **.71** | .27 |
| 7　前向きな人 | .26 | **.57** | .03 |
| **第3因子：大人的存在（3項目）** | | | |
| 9　信念を持っている人 | .37 | .24 | **.55** |
| 6　厳しく指導してくれる人 | .03 | .03 | **.54** |
| 3　リーダーシップのある人 | .15 | .39 | **.50** |

表３　親性準備性と重要な他者のイメージ

| | 親性準備性High群（N＝49） | | 親性準備性Low群（N=39） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 平均 | (SD) | 平均 | (SD) | t値 |
| 『自分を認めてくれる存在』 | 3.76 | (0.34) | 3.35 | (0.54) | 4.04*** |
| 『前向きな存在』 | 3.32 | (0.60) | 3.15 | (0.61) | 1.35 |
| 『大人的存在』 | 3.19 | (0.53) | 2.98 | (0.62) | 1.66 |

***$p$ ＜.001

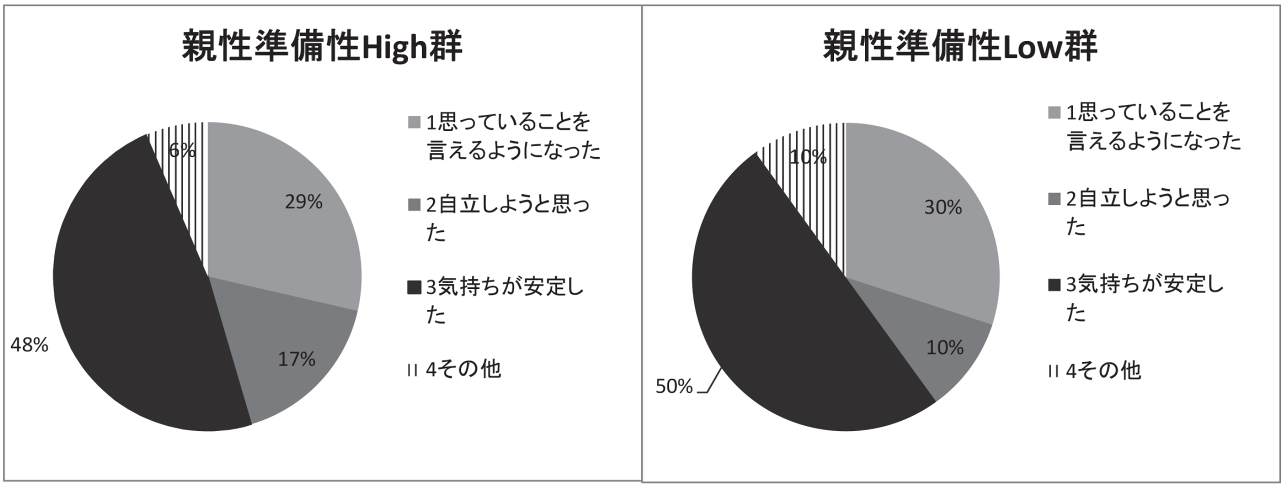


図５　重要な他者からの影響

同一化の対象を得ることが指摘されている（岡村・加藤・八巻，1995)。これらのことから、青年期の良好な友人関係は親性準備性にも良い影響があると考えられ、親性準備性を高める要因になった可能性がある。Blos (1962) は、青年期は親から分離し心理的に独立する時期と述べている。青年期に親以外の重要な他者からよい影響を受けることは、親からの独立や自律性の獲得に影響をもたらすであろう。そして、その出会いが親性準備性を高めることにもなると考えられる。

一方、Low 群は先生との出会いが High 群より多いという特徴があるが、出会った時期は両群ともに中学・高校時代が約８割とあまり変わらない。友人に関しては、両群ともに友人が半数を超えるものの、Low 群においては大学で出会ったと答えたものがいない。中学校、高校の時期は、他者との類似性による一体感を持ちやすい時期であるため、この時期での出会いは親性 High の友人関係とは質が異なる可能性がある。親性Low群にとっての友人（重要な他者）は親性準備性に影響を与える存在ではないのかもしれない。

内田（2014）の研究では、重要な他者が存在しないと答えた者の約65％の IWM が「不安定→不安定」の群であった。つまり、幼少期から青年期にかけて IWM が不安定だった者は、重要な他者そのものに出会っていない場合が多いと考えられる。しかし、青年期においては、形式的操作期の能力が高まり（メタ認知)、さらに新しい愛着対象の登場により、自分や他者との関係性を客観視することができるようになり、IWM は大きく変更する可能性も指摘されている（戸田，1999)。親性 High 群とは異なり、Low 群は重要な他者に出会えないのでなく、まだ出会っていない、もしくはこれから出会う可能性があるとも考えらえる。そのため、今後の出会いによって親性準備性が Low 群から High 群へ移行する可能性も視野にいれておく必要があろう。

**重要な他者のイメージについて**

内田（2014）の研究では､「前向きな存在」が IWM の「親密性の回避」得点を低下させることがわかっている。今回の結果では「自分を認めてくれる存在」が親性準備性を高める結果となり、IWM の変容を促す重要な他者イメージと親性準備性を高める重要な他者イメージが一致しない結果となった。これより、IWM と親性準備性を高める重要な他者とは、それぞれ存在が異なることがわかった。しかし､「自分を認めてくれる存在」「前向きな存在」いずれも肯定的な存在であり、自分に興味を持つ肯定的な他者の存在が、親性準備性や IWM を高める要因になるといえる。

伊藤（2003）は、中高生の親性準備性について検討し、子どもへの好意感情や子どもと接する積極性が親性準備性に影響を与えることを示している。これに加えて、本研究の結果から「自分を認めてくれる存在」という他者との関わりが、子育てへの感情や認識を高めるきっかけになることが示唆された。学校教育において、この「自分を認めてくれる存在」を体験することが出来れば、親

性準備性を高めることにつながる可能性がある。自分の存在価値を確かめられるような相手に出会えたと思えることは、親性準備性を高めていく上で重要だといえる。

加えて親性準備性はIWMとも関係があり、IWMを安定型に変容する「前向きな存在」との出会いも重要だと考えられる。

**重要な他者からの影響について**

両群ともに「気持ちが安定した」が約半数であり、そのように意識できる他者との出会いが親性準備性に影響することが分かった。また「思っていることを言えるようになった」も多かった。IWMの先行研究では、幼少期以降の他者との出会いにより愛着が変容することが明らかになっているが、他者との出会いがどのようなプラスの影響を与えたかまでは検討されていない（内田, 2014)。重要な他者と思える相手との出会いだけでなく、それによりどのように気持ちの変化が生じたかを明らかにすることで、親性準備性についても自身のプラスの変化をより意識できるようになると考える。

## まとめと今後の課題

本研究では、親性準備性の高さによって重要な他者との関係に差があるかを検討した。親性準備性が高い者は、低い者と重要な他者との出会いが異なることが示された。親性準備性が高い者は、青年期後期に大人として重要な他者と出会うが、親性準備性が低い者は主に中学時代の友人を重要な他者として捉える者が多く、青年期後期以降に重要な他者と出会う機会を持っていないことが示された。

親性準備性とIWMとの関係を検討した先行研究では（松本・重橋, 2016)、幼少期のIWMが不安定な者は親性準備性が低いことを示されている。IWMの変容には、重要な他者が影響することも示されている（内田, 2014)。また、本研究の結果から親性準備性と重要な他者の存在が関連することが示されており、これらの結果を踏まえると重要な他者の存在は親性準備性とIWMともに影響するといえる。

幼少期の養育者との関係が不安定な人々は、重要な他者、特に「自分を認めてくれる存在」との関わりで親性準備性が高まること、また「前向きな存在」との出会いでIWMがポジティブに変容することが重要になる。すなわち、アタッチメントの悪循環を断ち切ることを意識した他者の支援や関わりがより大切になってくると考えられる。早期には児童期において学校教育場面から取り組むことは可能であり、予防的な視点からの支援も行うことができる。例えば、学校現場であればクラス担任を子どもが「自分を認めてくれる存在」であると思い、担任との関わりで「気持ちが安定」する経験をするなどである。これらの体験がIWMの変容や親性準備性を支える力になると思われる。

また、親性準備性が低い者は青年期後期以降に重要な他者と出会う機会をもてていない可能性がある。IWMが不安定で親性準備性が育っておらず、子育てに悩む母親に臨床現場で出会う時、援助者との関係が大事になろう。援助者との関係がIWMや親性準備性の安定につながる可能性がある。

今後は、親性準備性、IWM、重要な他者の関係について、さらなる検討が必要である。また、本研究は青年期を対象とした研究であったが、親性準備性を育てることとは、子どもへの学校教育、妊婦に対しては産科や保健所などでの心理教育にて行うことも視野にいれて検討する必要がある。さらに、本研究は女性を対象として研究であったが、男性も親になり次世代を育成していく立場である。今後は男性を含めた一般の若者を対象に行い、今回の結果と比較する必要があるだろう。

## 引用文献


Bowlby,J.（1969).『Attachment and loss: Vol.1. Attachment.』*New York: Basic Books.*（黒田実郎訳1976『母子関係の理論 1：愛着行動』岩崎学術出版）10：7-16

Blos,P.（1962). On Adolescence; *Free Press.* 野沢栄司（訳）(1971）青年期の精神医学　誠信書房

榎本淳子（1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究, 47, 180-190

平田伸子（1999). 親準備性への支援　リプロダクティブ・ヘルツ／ライツの視点から　九州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 73-78

五十嵐南奈（2011). 女子大生における「親準備性」と両親の養育態度　聖心女子大学　臨床発達心理学研究　10, 58-71

伊藤葉子（2003). 中・高校生の親性準備性の発達　日本家政学会誌　54（10), 801-812

岩田崇・秋山康子・井上義明・深谷和子：青年期の親準備性二関する研究（1982). 昭和57年度厚生省心身障害研究報告書, 466-467

川瀬隆千（2010). 大学生の親準備性に関する研究　宮崎公立大学人文学部紀要　17（1), 29-40

数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹（2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達　教育心理学研究, 48（3), 323-332

厚生労働省（2014). 平成25年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数等 http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000053235.pdf

小池優美（2013). 青年期女性の親性準備性と就学前及び成人期の愛着スタイルとの関連　日本女子大学

人間社会研究科紀要　第19（３），99-113
松本奈巳・重橋のぞみ　2016　青年期女性における親性準備性と内的作業モデルの関連　福岡女学院大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻紀要　14，47-54.
諸井克英・木村有花・長井佐哉香・堺かおる・西田郁美（2013）．親との接触経験が親準備性傾向の形成におよぼす影響―女子青年の場合―　同志社大学　学術研究年報　64，71-81.
中嶋律子・後藤宋理（2009）．青年期の親準備性―子育て経験者との比較―　名古屋市立大学看護学部紀要　８，9-15
岡村達也・八巻甲一・加藤道子（1995）．『思春期の心理臨床―学校現場に学ぶ「居場所」つくり』
岡野雅子（2003）．青年期女子の子どもに対するイメージ―彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連―日本家庭科教育学会誌　46（１），3-13
岡本祐子・古賀真紀子（2004）．青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関する要因の分析　広島大学心理学研究，４，159-172
瀧川郁美・中見仁美・桂田恵美子（2012）．大学生の親性準備性と乳児の鳴き声に対する反応　関西学院大学　臨床教育心理学研究　３，38
寺尾絢美（2012）．青年期における「親準備性」に関連する要因　聖心女子大学　臨床発達心理学研究　11，3-17
戸田弘二（1991）．Internal Working Models 研究の展望　北海道大学教育学部紀要，55，133-143
鵜飼奈津子（2000）．児童虐待の世代間伝達に関する一考察―過去の研究と今後の研究―　心理臨床学研究，18（４），402-411
内田利広（2014）．内的作業モデルの児童期から青年期における変容―重要な他者という観点から―　京都教育大学紀要　125，117-130
山岸明子（2013）．青年期に記述された生育史の良好さと成人期の適応との関連―内的作業モデルを手がかりにして―　青年心理学研究　25，29-43

注１　本論文は松本奈巳（2015年度）の修士論文の一部を修正加筆したものである。
注２　元福岡女学院大学人文科学研究科臨床心理学専攻大学院生